

<紙碑>矢澤大二先生のご逝去を悼む

三井, 嘉都夫 / MITSUI, Kazuo

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

1

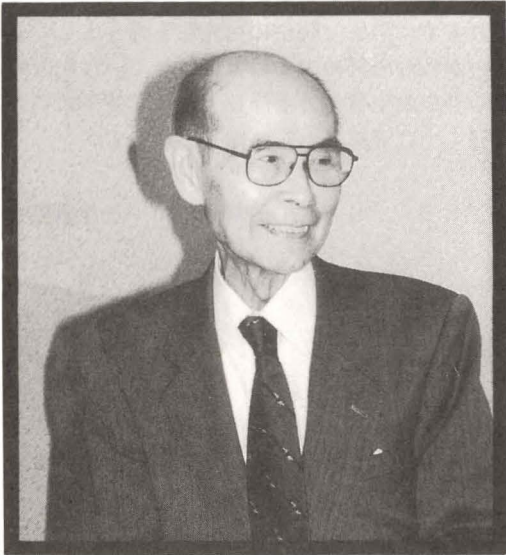
(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

1995-03-24

矢澤大二先生のご逝去を悼む



法政大学大学院元非常勤講師矢澤大二先生は1994年5月29日に逝去されました。享年81歳でした。1月22日の送別会やその後の大学院生との会合ではお元気にお話し下さったのにと、訃報を受けた時の一同の衝撃は誠に大きくありました。

先生は1913年（大正2年）、長野県上諏訪町（現諏訪市）でお生れになりました。小学校時代は恩師春日琢美先生の、旧制諏訪中学では恩師三澤勝衛先生の御薫陶を受け、その刺激的な授業と宿題の作業を通じて地理学を生涯の途と志すようになったと聞いております。

旧制新潟高校から東京帝国大学理学部地理学科へ進学された矢澤先生は、大学の進級論文で東京近郊の防風林を研究され、戦後の困難の多かった時期に集中的な調査研究を重ねられた結果、「気候景観」の概念とその科学的な研究方法を確立されたといわれております。

1936年母校の諏訪中で教鞭をとられ、1938年

には信濃教育会からの派遣で満州へ参り、湿润気候から乾燥気候地域への移行について関心をいだかれたようです。1939年には、多田文男先生、保柳睦美先生らと東亜研究所の北支蒙疆黄土地帯学術調査団の地理班の一人として乾燥気候地域の土地利用、とくに農耕の乾燥限界の問題について調査され深く興味をもたれたと承っております。またこの年のモンゴリアの天候異変とその作用についての現地視察が、乾燥気候地域縁辺部での気候変動に関心を抱く契機ともなったようですし、この調査の経験は、後年アンデスや東アフリカ調査に大変役立ったと先生自らが竹内啓一さんとの対談（地理学を学ぶ—1986—古今書院）でも語っておられます。

渡辺光先生のおすすめで、陸軍気象部に入り気象業務をとおして気象学を学び、「古典気候学」に対して総観気候学や天候気候学などを中心とする「近代気候学」の重要性を説いて、ドイツをはじめ諸外国の研究成果を体系的にまとめられた「気候学」（地人書館、1956年）は、戦後の日本における気候学研究に新しい方向づけを与えられたと中村和郎さんとも言われております（地学雑誌 vol.103, No. 5, P598）。

1990年に上梓された「気候地域論考—その思潮と展開—738頁」（古今書院）は、原著にあたえられた欧文著書と論文だけでも1380篇を数え、気候地域に関しては世界中の研究者が拠り所とするに値する大著です。執筆中と考えられた何年間か法政大学の地理学研究室で講義に行かれる前、榎山政子先生と御一緒になっては、榎山先生から矢澤先生に早く出版して下さいとお願いしていたのも筆者には昨日のように思えてなりません。

矢澤先生は偉大な研究者であると同時に素晴らしい教育者でもありました。竹内啓一さんとの対談でもわかります通り、専任として教鞭をとられた

都立大学では申し上げるまでもなく、非常勤として努められた東大や、一橋大学、明治大学、日本大学でも学生から意見を引き出し、学問に対する関心を惹かせたという点は誠に敬服するところであります。

法政大学大学院では1976年4月から本年3月まで18年間の永きに亘り御講義賜りました。その講義内容は誠に無駄のない内容で、充実したものであったと聞いております。学生との対話に長く時間を費やされ、学生は忘れ難い感銘を受けておりました。講義30分ないし1時間前には必ず地理学研究室に立ち寄られ、専任教員であった筆者らにもきわめて有益な話をして下さいました。

筆者らが外国留学などを楽しくさせていただけたことも矢澤先生の外国地理学者を大事にされたお蔭と感謝致しております。時間になると、院生の誰かが迎えにやって来られ、ではまた来週と申されては教場へ向われました。2~3年前からは、吉祥寺の自宅から市ヶ谷の法政大学へタクシーでお通い下さっておられたと後で聞いた程であります。学生・院生の可能性を導き出してあげるのが教師の努めですと言われていた先生のお姿が今なお生き生きと浮び上がって参ります。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1994. 11. 30 三井嘉都夫